

今月のみことば 2026年10月

わたしはぶどうの木、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人にとどまっているなら、その人は多くの実を結びます。（ヨハネの福音書15章5節）

私たちの命の源は何か

秋を感じる今日この頃、黄金色に実った稲の刈り入れが進み、りんごやぶどうなど、さまざまな実りを目にする季節となりました。豊かな実りの背後には、生産者の方々の働きがあり、植物も根や幹から水分や養分を受けながら育っています。

今月のみことばは、イエス・キリストが十字架を前に弟子たちへ語られた「別れの教え」の一節です。イエスはご自分を「ぶどうの木」、弟子たちを「枝」にたとえられました。枝が自分の力だけで実を生み出すのではなく、木につながって水分や養分を受けることで実を結ぶように、弟子の歩みも、キリストとの結びつきから愛や喜び、互いに愛し合う歩みが生まれると教えられたのです。

ここで「とどまる」とは、「自分の力で何とかキリストにしがみつく」という意味ではありません。キリストの愛と言葉に身を置き、この方からいのちを受けながら歩むことです。実を結ぶことは、神に認めてもらうための条件ではなく、キリストにつながる歩みの中に生み出されていくものなのです。



私たちは、日々の仕事や家庭、人との関わりの中で、「もっと頑張らなければ」「しっかりしなければ」と力を尽くすことがあります。努力や責任は大切です。しかし聖書は、神に受け入れていただくために、まず立派な人にならなければならないとは語りません。むしろ、自分の力だけで生きることができない私たちに、神の恵みが差し出されていると語ります。

聖書が言う「罪」とは、単に悪い行いだけではありません。神を離れ、自分を人生の中心として生きようとする人間のあり方そのものを含んでいます。イエスは、その私たちを神のもとへ招くために十字架にかかり、死からよみがえられました。この方を信じる者に永遠のいのちが与えられると聖書は伝えています。それは、ただ死後のことだけではなく、今ここから神との新しい関係に生き始めるいのちでもあります。努力によるご褒美ではなく、キリストを通して与えられる恵みです。

秋の実りを目にする時、実を支えている木のことに少し思いを向けてみてはいかがでしょうか。聖書は、私たちを生かし、人生を支える真のいのちが、イエス・キリストにあると語りかけています。(M)